

お釈迦様が生きておられた時のこと。

キサーゴータミーという若い母親がいました。

ようやくよちよち歩きができるようになったばかりの一人息子を失い、悲しみに打ちひしがれます。

彼女は、息子を生き返らせ、治す薬を求めて釈尊のもとを尋ねます。釈尊は一人も死人が出たことのない家から白いケシの実をもらってくるようにと言います。

町中の家々を尋ねたキサーゴータミーは、

「ああ、なんと恐ろしいこと。

私は今まで、自分の子供だけが死んだのだと思っていたのだわ。でもどうでしょう。」

町中を歩いてみると、死者のほうが生きている人よりずっと多い。」

と死はどこの家にもあることに気づかされました。

ゴータミーは次第に心の平静さを取り戻し、自分の命と思っていた子供の死を受け入れていったことでしよう。

ゴータミーにとってケシ粒さがしは、自分探してもあったはずです。子供の死はもうとりかえしのつかないことだ、しかし子を亡くしてもなお生きていく私はここにいて、と。こうして釈尊のことばの本意を知ったゴータミーはあらためて釈尊のもとに行き、そこで釈尊は初めて法を説かれたのでしよう。ゴータミーは最愛の子供を亡くしたことを縁に、仏法に出会い、よろこびを持って自分の人生を生き直すことができました。

江戸時代の禅僧、良寛さんは、文政十一年(1800年)の地震のおりに、知人の無事を喜ぶ手紙の中で、「親るい中死人もなくめでたく存じ候」といいたがら、「しかし災難に遭う時節には災難に遭うがよく候、死ぬ時節には死ぬがよく候、これはこれ災難をのがるる妙法にて候」と書いておられます。

この言葉からも、無常の事実を当然のことと受け入れつつ、なおそれを越えるあり方を見いだした人に備わる本当の強さがうかがわれるのではなないでしょうか。一体、これらのことばを発した先人たちのもとにどのような仏教の真理がはたらいているのでしょうか。これを知ることが、現代の社会に生きていく私たちにとっても、きわめて切実なことであるように思われます。ぜひとも「生死の一大事」について聞法を深めてゆきたいものです。